

国立大学における入試研究の動向

総

括

以下の解説は、昭和62年度に各大学で実施した入試関係の調査研究報告から、概要としてまとめたものである。62年度は国公立大学では初めての経験である「受験機会の複数化」に踏み出した初年度である。全部の大学を2分して2回の第2次試験を実施したから、各大学当たりの志願者が急増した。このことに関していくつかの大学で取り上げられている。また、合格者が希望大学に入学手続きを済ませた後で入学者が確定する、いわゆる事後選択制を採用したために、入学定員を確保する必要から合格発表の時の合格者数の推定や欠員が生じたときの補充に、参考に資するデータもない状態であったからほとんどの大学が苦勞した。このため最初の予想に反して入学辞退者が少なく、定員を大幅に上回る入学者を迎え入れ、今後4年間の教育方法に頭を悩ましている大学も少なくはない。

「受験機会の複数化」に伴う上述の問題点などに関連して、いわゆる足切りと一般に称されている2段階選抜を実施せざるを得なかった面もあるが、マスコミを中心として「門前払い」として厳しい評価を受けた。これについての大学側の言い分や、多少の理論的根拠は無くもないが、一つの反省材料として虚心坦懐に耳を傾ける必要もあろう。他方、入学手続き者の過不足については当該大学の問題であるにもかかわらず、また大学関係者の努力も評価せず、大学

側の立場を無視した形での一方向的な評論がなされていることに、腹立たしさを覚えるのは私一人ではないであろう。

複数化の決算としては、上記の他に受験生の併願行動の一貫性や出願の地域依存性など多くの調査すべき項目があり、この種の調査研究によっていままでも批判的となっていた「入りたい大学よりも入れる大学」に代表される偏差値偏重出願などという声に反論し説得できるデータも得ることが可能であると信じている。また、これらの調査の積み重ねによって複数化に対応するための有意な内部データの蓄積なども困難な事柄ではないと考えられる。

これ以外にも入試の多様化に対応して、小論文試験、面接試問など試験方法の改善とその評価採点に関する研究や、推薦入学・社会人特別選抜・帰国子女特別選抜などさらには外国人留学生試験と多種類の選抜方式を採用する大学が増えていて、これらに対する調査研究報告の数も増えている。またこのような多様化・多種類化入試の基礎となるべき、高校調査書についての分析や特別な試験制度の評価に関する基本的な研究結果の報告が多く見受けられる。通常入試に関連した調査研究結果と共に、これら研究結果は他大学の関係者にとっても他では求め得ない貴重な資料となるであろう。

ただ個人・高校・大学のプライバシーに関す

る面が多く公表をはばかる性格の資料や調査結果が多く、公表されている結果は少ない。しかし大学の中で入試問題がなおざりにされているわけではない。むしろ本務の研究テーマを抱えながら、入試の問題に多くの時間を割いている

研究者も少なくない。動向の内容は研究成果の一端を定性的に紹介したに過ぎないが、この奥には関係者のたゆまざる努力が蓄積されていることを賢察いただければ幸いである。

共通第1次学力試験と第2次試験

共通第1次学力試験、第2次試験に関しては、試験問題の統計的分析(GP分析等)、各種科目試験の得点分布及び同時分布の分析、入試成績以外の度数との関係の分析、総合成績のための配点、自己採点の誤差などの分析が行われている。

入学試験は本来入学希望者が入学後の学習に必要なとする学力を備えているかどうかを確認するのが主な目的である。しかし、現実には競争試験と化し、学力の個人差の識別を主たる役割とするようになってきている。いずれにしてもそれら目的にふさわしい内容や困難度の問題が用いられなければならない。共通第1次学力試験の各問題項目が、各大学の側からみて適しているかどうかは、自大学で準備した第2次試験の問題と同様、常に確認しておく必要がある。本報告をみる限り、各大学の第2次試験などに関連して第1次試験の問題項目を検討したという報告がほとんど見当たらない。これは、各大学がこのようなことを行っていないのでは必ずしもなく、報告されないのかも知れないが、もっと情報の交流があってもよさそうである。

学力・能力の個人差の測定という観点からす

ると、各入試科目の得点分布は基本的な情報である。これについては、ほとんどの大学が何らかの形で報告している。

いくつかの大学では、共通第1次学力試験の全国の得点分布に対し、当該大学の分布の位置を確認したり、受験者と入学者の得点分布を比較したりしている。しかし、そこから何を読み取るかについては、明確な説明があまりない。

入試に利用される各種成績の間の相関係数についての報告は極めて多い。各種成績別の得点分布と同様、成績間の同時分布も基礎的資料として役立つが、報告の便宜もあって相関係数に要約されることが多い。各科目間の相関係数は、限定された制約の中ではあるが、各科目の学力測定の特徴を反映し、細かにみていくといろいろと示唆を得る。ある大学の場合、共通第1次学力試験の物理と数学の間の相関係数の方が、第1次試験と第2次試験の同じ科目物理同士の間相関係数より高いことが観察される。相関係数の標本分布などを考えれば、わずかな数値の違いをとり立てるのは無意味だが、少なくとも同じ科目の相関が、異なった科目間の相関と